愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第19 号
2018.5
1-8p

# 南知多町天神山遺跡の調査メモについて

小澤一弘 * ・川添和暁
* 愛知県埋蔵文化財センター専門委員

南知多町所在の天神山遺跡は、縄文時代早期末土器の標識遺跡として広く知られている。天神山遺跡の調査は知多半島で最も早い時期に行われた学術調査であったこともあり、調査の内容については文字記載で示されているもののみであった。この度、調査当時のメモを報告することによって、その記載内容を模式図として確認することができた。この情報により、天神山遺跡の堆積状況を可視的に検討できるとともに、今後、出土状況を勘案して遺物検討ができるものと期待されるものである。

## 1．はじめに

半世紀も前の天神山遺跡発掘調査の土層が書かれた 3 枚の切り取られた野帳片について、本稿に入る前に、その経緯を回顧する。

昭和 53（1978）年、名古屋大学考古学研究室で、楢崎彰一先生の指導により、天神山遺跡の整理に入った最初に土偶を見た時の感激と、これがおせんべい土器かとその薄さと緻密に焼きしまった土器片を見て驚いたことを今でも記憶している。

整理用の木箱に入った入海式、石山式、天神山式の土器片、新聞紙に包まれた魚骨（マグロやタイの椎骨）の出土品を、土器片については分類と厚みをラベル毎に計測していた。

陳列室で学生と整理をしていた時に、大参義一先生より、「澄田正一先生より預かったもので、役にたつのでは」と野帳を切り取った 3 枚のメモを手渡された。メモには天神山遺跡発掘調査の土層概略図が書かれていた。

また名古屋市博物館で昭和 57（1982）年『東海の縄文時代』が開催されたが、開催前に、整理中の天神山遺跡の土器の中で、ほぼ完形品になる深鉢を安達厚三氏に見せると、みずから復元すると持っていかれ、展示されたことが懐かしく想いだされる（図 1）。

結果的に続けていた整理が頓挫、整理は終了することもなく、遺跡にとって重要な記録の土層概略図が手元に残ったが、この野帳のメモのことは 30 年近くまったく忘れていたのである。

退職、センターを離れる時に、天神山遺跡の重要性を考える時、手元にある土層図を、今後公表する機会の可能性がある川添和暁に託したのが今回の発端でもあった。

天神山遺跡の発掘調査関係者でもあった紅村弘氏を江崎　武氏の紹介により平成 28(2016) 年 1 月 26 日 3 名で紅村邸を訪ね、当時の話を

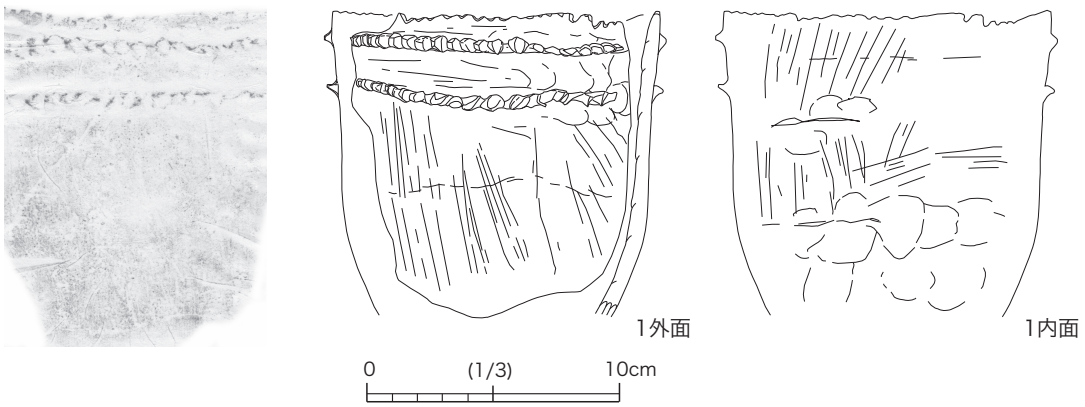



図 1　天神山遺跡出土入海 I 式土器（名古屋大学文学研究科考古学研究室 蔵）

聞く機会を得た。その後、岩野見司先生が調査に参加されていたことを知り平成 28 年 4 月 30 日に荒木集成館において当時の話を聞き写真を見せていただいた。

かつて愛知県埋蔵文化財センターの理事・専門委員としてご指導いただいた鬼籍の澄田正一先生、楢崎彰一先生、大参義一先生に関わるこのメモをセンターの紀要で公表するのも不思議な巡り合わせである。これを期に今後天神山遺跡の研究が進展することを期待しています。

（小澤一弘）

## 2．天神山遺跡について

天神山遺跡は、愛知県知多郡南知多町大字大井に所在する、大井漁港側の南東方向へと延びる細長い丘陵端部上に立地する。天神山遺跡は、この丘陵端部でも標高 15m 前後の西側傾斜地に位置し、東側傾斜地には天神山Ｂ地点が、北東側約 100m の東側傾斜地には塩屋遺跡が位置する。これらの遺跡は、同一丘陵上に近接して群をなしており、2km ほど南にある新津遺跡・同（第２地点）・同（第４地点）も同様のあり方を呈している。

天神山遺跡はかつては入道遺跡として紹介されていた ( 磯崎・杉崎・久永 1965)。遺跡の発見は、昭和 30(1955) 年 4 月に地元在住の上田公治・山本善輔らによって遺物採集されたことによる。同年 8 月に、上田・立松宏・楢崎彰一により 1 ㎡の試掘調査が実施され、翌昭和 31(1956) 年 1 月に上田・楢崎・立松・紅村弘らにより発掘調査が行われた。調査は、凹地のほぼ中央部の上方に第Ⅰトレンチ、その下方南寄りに第Ⅱトレンチが、それぞれ長さ 8m・幅 1.5m で東西方向に設定された ( 岩野 2002)。

1956 年の調査では、土器・土製品・石器・骨角器*・獣骨・魚骨が出土しており、現在も名古屋大学文学研究科考古学研究室をはじめ、南知多町教育委員会・愛知県陶磁美術館で遺物が収蔵されている。ところが調査時の図面類は、現在所在不明となっており、当時の調査方法などは、上述したような文字記載のみが知られる程度であった。

このような状況にあって、本稿で紹介する調査メモの存在は極めて貴重な情報と考え、まずはこの内容を報告することにした。

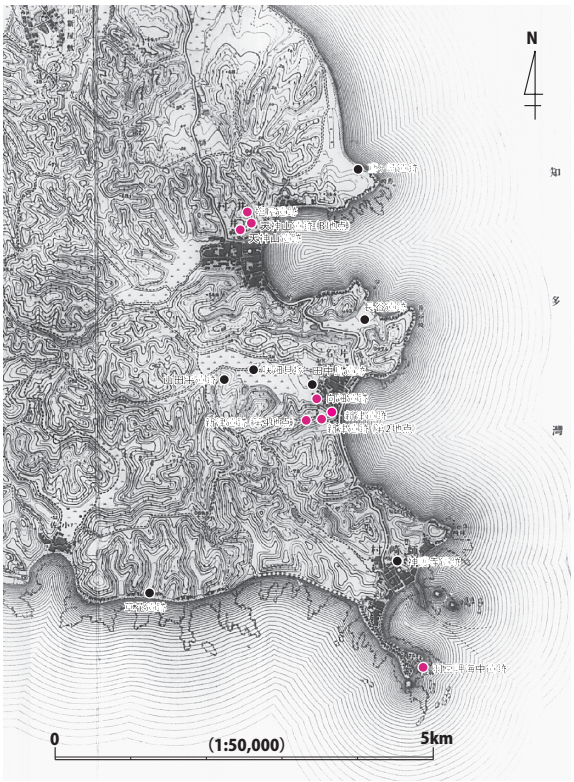



図２　天神山遺跡と周辺の縄文時代の遺跡
（赤色の遺跡位置が縄文時代早期の遺跡位置）
明治 24 年 陸地測量部「師崎」より

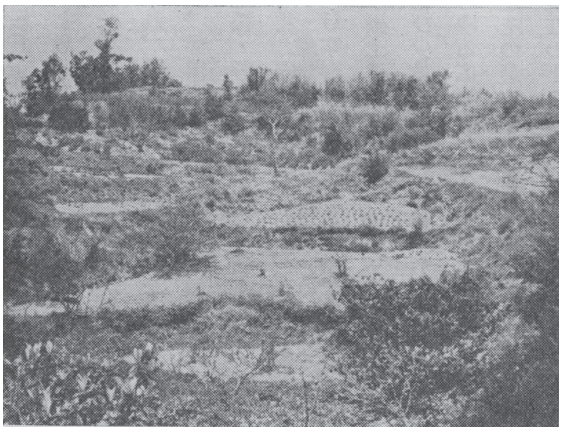


図３　天神山遺跡全景写真（紅村 1963 より）

* 骨角器については、別稿で取り上げたので、参考にされたい（川添 2018）。

## 3．天神山遺跡調査メモについて

図４・図５に、野帳に記された調査メモの全ページを掲載した。調査メモは７枚分 14 頁あるが、白紙頁が２頁分あるので、実際には 12 頁に記載がなされている。平成 27(2015) 年に実見した際には、３部に綴じられており ( 図４左上 )、さらにクリップで一つにまとめられていた。７枚分それぞれには紙の片面に No. が記されていた。調査メモの順番を示すもので、記載内容からして、すべてが綴られた順番を示している可能性がある。調査メモの主な記載は黒鉛筆が主で赤鉛筆も用いてられている。これらは筆跡などから同一人物によるものと考えられる *。一方、No. の記載はインクペンによるもので、同じインクで「30 年」と記載されているものもある。No. は遺跡や内容による順番ではなく、もともとは記載年別に付された ( あとで整理された ) ものの可能性もある。以下、No. 別に記載内容を見ていくことにする。便宜的に、No. の付されている面を No. □ -1 として、その裏面を No. □ -2 とする。

○ **No.1-1**　( 立松宏君談 )【赤字】
知多郡師崎町大字大井字入道 ( 通称天神山 )
非貝塚
包含層厚約 1m
-70cm 位で５～ 10cm の中間層を挟在して上下両層に分層される。
機械的に９層に分層し最下部 118cm。
上下両層を通じて尖底

○ **No.1-2・No.2-1**
1st　耕作土　-10cm　小破片多し。
Ⅱ nd　黒色粘土 ( 炭化物多し )　破片大型となる。
Ⅲ rd　黒色粘土 ( 粘土力強くなる )
-25cm 鹿角
Ⅳ th　下端　-40cm　Ⅲに同じ
Ⅴ th　遺物少なくなり礫多くなる。
(厚５～ 10cm)
Ⅵ th　遺物多くない
下辺部より小兒頭大の礫塊不規則出土
-55cm
Ⅶ th　褐色土層　爪形文土器多くなる。
Ⅷ th　同上
Ⅸ th　突帯（圧痕）多くなる。
地盤は岩盤の凹凸あり。

○ **No.2-2**
丘陵突端付近で
丘陵をはさんで
東西の斜面にあり。
西を第Ⅰ地点　東を第Ⅱ地点
付近にておせんべい土器片採集
scraper（硬砂岩　chert）3
無茎石鏃（chert）1
下層―早期末【赤字　「子母口式」を消す】
上層―前期初【赤字　「茅山式」を消す】

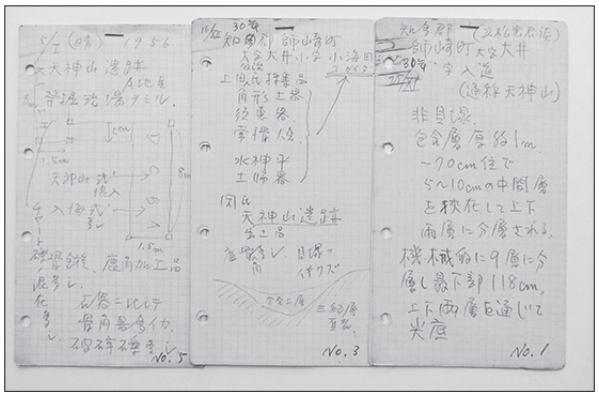
○ **No.3-1**
知多郡師崎町大字大井字小海田（コカイダ）
上田公治氏採集品
角形土器　須恵器　常滑焼　水神平　土師器
同氏　天神山遺跡出土品
鹿骨角多シ　貝塚ヲ伴ワズ
【土層断面模式図】

○ **No.3-2**
12 月 27 ～ 28 日
測量（楢崎・立松・紅村）
27 日　幻燈二より座談会
１月４～８日
発掘（澄田・楢崎・紅村・立松・大参）
４日　午前到着　午後より発掘
８日　午后報告会（大井町ニテ）

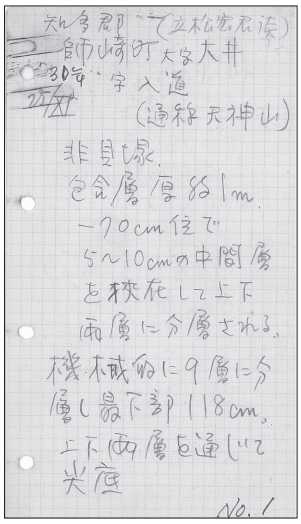
○ **No.4-1**
遺物保管場所　師崎中学校（磯部幸男教官）
【遺跡位置略図】

○ **No.5-1・No5-2・No.6-1**
5/I【１月５日のことか】（晴）1956
天神山遺跡 A 地点　発掘現場ヲミル
【グリッド配置図：図６】

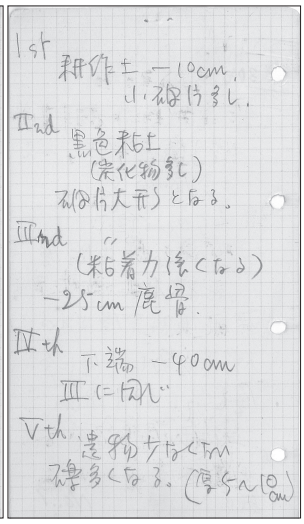
* この調査メモの筆跡については、岩野見司先生から、澄田正一先生によるものである、との見解を頂いた。



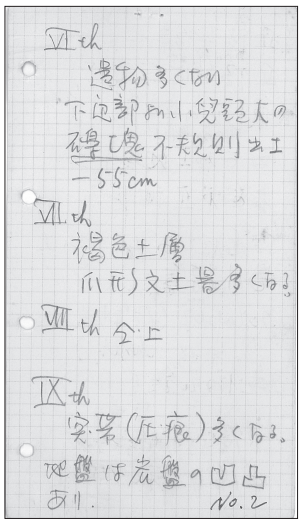
天神山遺跡調査メモ _ もとの状態
N0.1 ～ 2、No.3 ～ 4、No.5 ～ 7
で綴じられていた



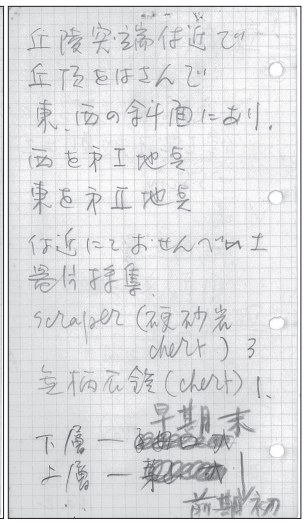
No.1-1



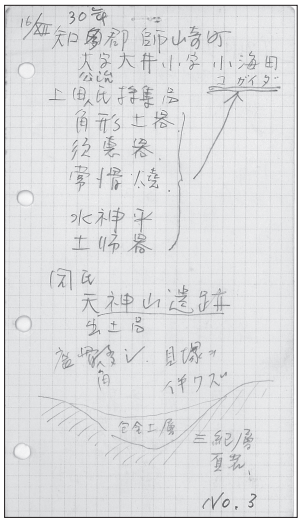
No.1-2



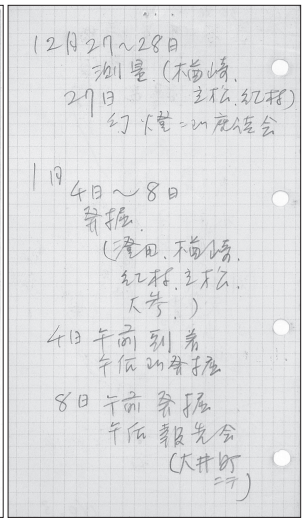
No.2-1



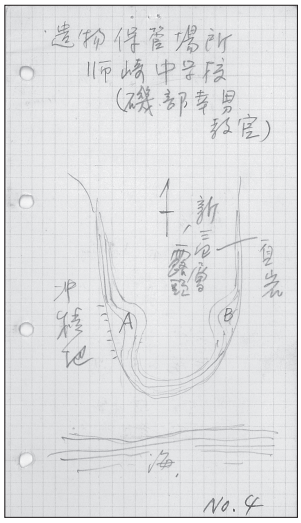
No.2-2



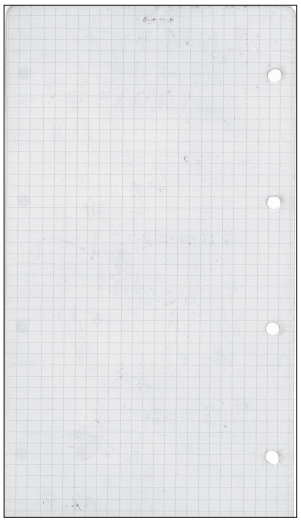
No.3-1



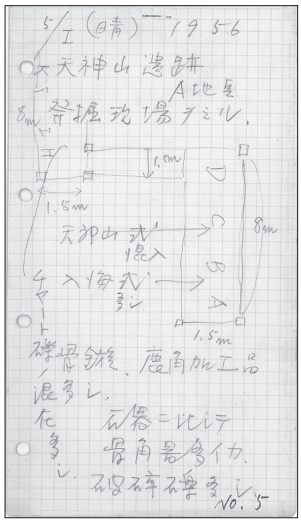
No.3-2



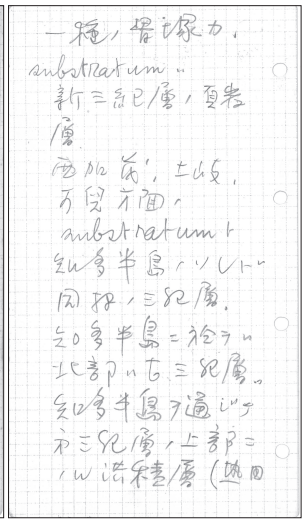
No.4-1



No.4-2

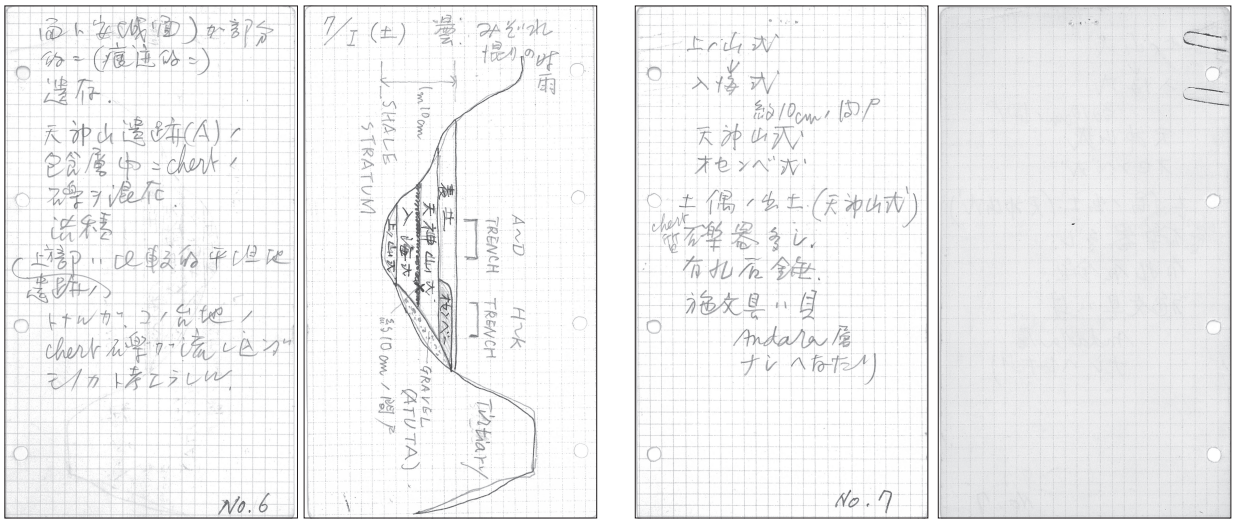


No.5-1



No.5-2

図４　天神山遺跡調査メモ１




No.6-1　No.6-2　No.7-1　No.7-2

図５　天神山遺跡調査メモ２



図６　天神山遺跡 1956 年調査風景写真（岩野 2002 より）

骨鏃・鹿角加工品多シ
石器二比シテ骨角器多イカ
破砕礫多シ
一種ノ骨塚カ
新三紀層ノ頁岩層
西加茂・土岐・可児方面ノ nubst ratum ト
知多半島ノソレトハ同様ノ三紀層。
知多半島二於イテハ北部ハ古三紀層。
知多半島ヲ通ジテ第三紀層ノ上部二ノル洪積層（熱田面ト安城面）ガ部分的二（痕跡的二）遺存。
天神山遺跡（A）ノ包含層中二 chert ノ礫ヲ混在。
洪積
遺跡ノ上方部ハ比較的台地ノ chert 礫ガ流レ混ンダモノカト考エラレル。

○ **No.6-2・No.7-1**

7/I【1 月 7 日のことか】
曇 みぞれ混りの時雨

【土層断面模式図】
上ノ山式
↓
入海式
約 10cm ノ間層
天神山式
オセンベ式

土偶ノ出土（天神山式）
chert 質礫器多シ
有孔石錘
施文具ハ貝　Anadara 属　ナシ　へなたり

以上、内容を概観した。

No.1-1 ～ No.3-1 までは、1956 年 1 月の調査に入る前の記録ではないかと推測され、特に No.1-1 ～ No.2-1 は、1955 年 8 月の試掘調査の成果である可能性がある。No.2-2 では遺物採集地点が 2 箇所あること、No.3-1 は上田の採集資料の記録で、遺跡発見時の様子が記されているといえる。

1956 年の調査記録としては、No.3-2 ～ No.7-1 が当たると考えられる。No.3-2 は、天神山遺跡 1956 年調査の日誌に当たる内容が記されている。No.4--1 には、天神山遺跡の位置略図記されている。No.2-2 で、第 I 地点としたものが A に、第 II 地点としたものが B と記されている。発見当初、入道遺跡として紹介されたこの遺跡が、昭和 30 年 12 月に文化財保護委員会宛に出された発掘届け（図 7）では、「天神山遺跡」と呼称されるに伴い、天神山遺跡 A 地点と天神山 B 地点という名称になった。

No.5-1 ～ No.7-1 は、1 月 5 日および 7 日に、調査の経過と所見が記されたものである。No.5-1 には、調査区の配置図が記されている。幅 1.5m・長さ 8m のトレンチが東西方向に 2 本設定されたことは知られていたが（岩野 2002）、この調査メモによって、トレンチの中が、それぞれ A ～ D と H ～ K の区に分けられていたことが判明した。恐らく A ～ D の方が第 I トレンチ、H ～ K の方が第 II トレンチであろう。この調査メモには両トレンチ間の距離の記載は無いが、トレンチ設置方向（東西方向）に幅 1.5m の横長の区域が設定されていたようである。筆者はこの区画も調査トレンチではなかったかと、推測している。その理由は以下の 3 点である。1 点目の理由は、調査メモに記されていた区画の形状である。2 点目の理由は、現状では E ～ G の区の記載が欠落している点である。3 点目の理由は、調査風景を記録した岩野見司先生の写真（図 6 左）にある。この写真は、第 I トレンチ（A ～ D 区）を中心として南東方向から撮影されたものと考えられる。写真の中央左側付近で、トレンチが 90 度クランクした状態で掘削されており、その長さは少なくとも 4m 以上はあったものと推測される。すなわち第 I トレンチ D 区に向かって直交方向にも掘削された調査トレンチであった可能性が高い。そのトレンチの規模については確実な証拠はないが、E ～ G の 3 区分であったことを想定すると、長さは 6m であった可能性があろう。以上のことを踏まえて、図 8 に想定される調査トレンチ配置図を示しておく。

遺跡の所見については、熱田層相当の第三紀層で形成された凹地形に土器・石器・骨角器の包含があり、一種の骨塚ではないかとの所見が示されている。包含層中にはチャート礫が多く混在しており、台地上方からの流れ込みであろうと推測している。土器については、上ノ山式→入海式→約 10cm の間層→天神山式→オセンベ式が層位的な関係をもって出土したと記されている。

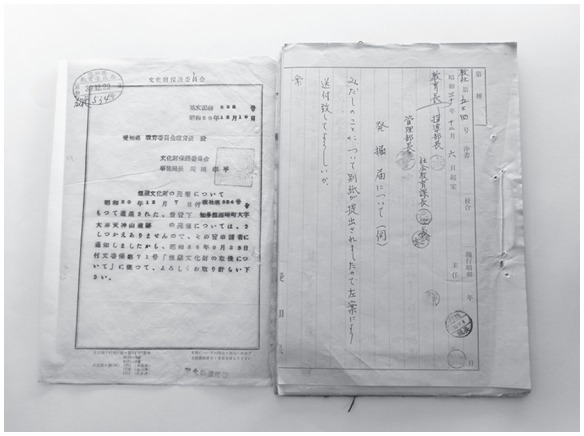


図 7　天神山遺跡 1956 年調査発掘届関係書類写真

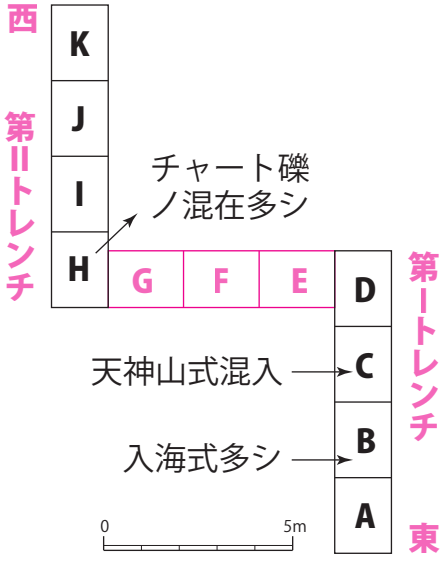



図 8　天神山遺跡調査トレンチ配置想定図

No.6-2 には、調査成果を踏まえた土層断面模式図が記されている。この模式図は野帳のマス目を用いて記されたもので、用紙に入るように縦横変倍の状態となっていた。この縦横変倍を等倍にして、上述したトレンチの位置を補正したものが図 9 で、凹地の南北断面を西側からみた図となっている。調査時の層序については以下のように言われている（岩野 2002）。

**○第Ⅰトレンチ**

第 1 層：表土および粘性の強い黒色土（層厚約 50cm、土器・石器・骨角器多量包含、層下部には多量の魚骨）

第 2 層：砂混じりの土層（層厚 10cm ほど、土器の包含少ない）

第 3 層：粘性の強い黒色土層（層厚約 40cm、土器・石器・骨角器包含）

第 4 層：地山（岩盤）

**○第Ⅱトレンチ**

表土および第 1 層：礫混じりの褐色土層（層厚約 30cm、多量の土器・石器・獣骨・魚骨を含む）

第 2 層：第Ⅰトレンチ第 1 層土器少量出土

Ⅰトレンチ第 1 層は天神山式の層で第Ⅱトレンチ第 2 層と同一、第 2 層は間層、第 3 層が入海式・上ノ山式の層にあたる。第Ⅱトレンチ第 1 層はオセンベの層に相当する。

## 4．おわりに

本稿では天神山遺跡の調査メモを報告して、調査の方法や経過について可能な限りの復元を試みた。これまで文字記録のみであった内容について、視覚的に追検証することができた。これによって天神山遺跡出土資料について、遺物の注記をたどることで、遺跡との関連で検討することがよりできるようになったといえる。

天神山遺跡の立地する段丘上には、天神山 B 遺跡・塩屋遺跡の所在が知られている（図 10）。これらはそれぞれ活動の場とする遺跡群として捉えられるものであるが、そのためにも、各遺跡の内容について詳細に検討を行わなくてはならないと考えられる。

天神山遺跡の調査が行われて 60 年が経過している。本遺跡が、当地域を代表する縄文時代早期末の標識遺跡であることからも、今後も継続した調査研究が必要になるといえよう。

（川添和暁）

本稿を草するに際し、以下の方々からのご教示・ご配慮を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。

岩野見司・江崎　武・梶原義実・紅村　弘・杉本真由・山本直人

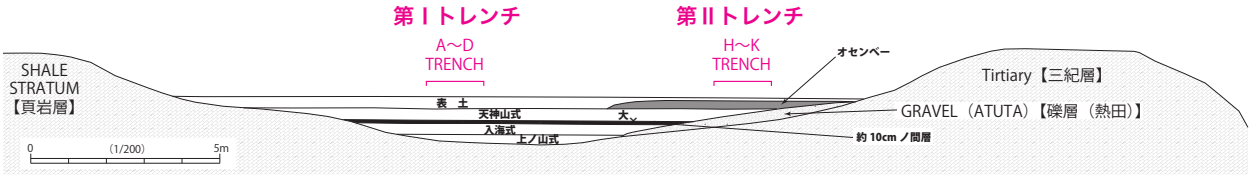



図 9　天神山遺跡土層断面模式図（調査メモ No.6-2 を補正）

**参考文献**

磯崎幸男　1984「塩屋遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究』1.1 ～ 28 頁　知多古文化研究会

磯崎幸男・杉崎　章・紅村　弘　1965「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41.1 ～ 12 頁　古代学研究会

岩野見司　2002「天神山遺跡」『愛知県史　資料編 1　考古 1　旧石器・縄文』245 ～ 251 頁　愛知県

川添和暁　2018「東海地域・関西地域における縄文時代早期骨角器の様相」『考古学フォーラム』24. 考古学フォーラム編集部

紅村　弘　1963『東海の先史遺跡　綜括編』名古屋鉄道

山下勝年ほか　1997『南知多町誌　資料編 6』南知多町




図 10　天神山遺跡・塩屋遺跡の位置と天神山遺跡調査トレンチ位置想定図